
星戦戦記

久保 徹

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

星戦戦記

【Nコード】

N2495A

【作者名】

久保 徹

【あらすじ】

宇宙暦五二二年、生活圏を銀河の五割まで拡大翌年、宇宙暦から銀河暦へ同年、銀河連邦発足銀河暦百二十年、ザウザー軍事惑星国家、銀河連邦に宣戦布告する

EP1st 出会い

飛躍的な科学技術の発展による宇宙開発は、人類の生活圏をも飛躍的に拡大させ、今では銀河の七割にまでなった

今から百二十年前、生活圏が銀河の五割となった時、宇宙暦にして五百二十二年、暦を宇宙暦から銀河暦に変更し同年には《銀河連邦》を発足

惑星を一つの国家とし連邦に加盟する国家は五十を超えた

人々は惑星間シャトルに乗って様々な星へ出掛けていく

「シュウヘイ！急げよ、ほら！」

「わかってるよ！すぐ行ってくてば！」

ここは銀河連邦軍アジア方面基地

今、基地内の空港へ向かう廊下を、銀河連邦の軍服を着た青年二人が走っている

「お前が昨日さっさと寝ないからだぞ！」

前を走る黒髪の青年、《クロウリィ・ラウ》十九才、多少口の悪い推理小説好きの男

「だって新型のテストだよ！？OSのチェックはしとかないと！」

少し遅れて後ろを走る茶髪の青年は《シュウヘイ・サカキ》同じく十九才、趣味のバトルシミュレータは格闘・射撃とにもかなりの腕前だ

廊下の突き当たり、転送ルームに駆け込み、空港行きの転送機に入る

足元から光が渦巻きながら体を包んでいく

次に転送機から出るとそこはもう空港ロビー、窓の外には発進準備を終えている軍用シャトルが見える

「急げ！」

二人はシャトルに向かって猛然と走る

係員にパスを見せるがスピードを緩めないで走り抜けたため、確認など出来るはずもない

「よし！間に合った！」

なんとか滑り込みセーフでシャトルに間に合った

そして背中に視線をビシビシ感じながら席に座った

（遅れてすいません……）

そしてシャトルはゆっつきり発射位置につき、カウント0でブースターに点火、凄まじい加速でシートに張り付けられながら飛び立った

飛び立ってしばらくするとみんな思い思いに到着までの時間を過ごしていた

クロウリイは荷物の中から一冊の本を取り出した

「何？また新しいの？」

それを見てシュウヘイが横から覗きこむ

タイトルは《雪国猟奇殺人事件／＼刻まれた足跡／＼》というもの

書籍の完全電子化がされて久しい今日、紙の本は非常に珍しいものだ

一方シュウヘイはノート型端末で新型機のデータに目を通す

画面には人型機動兵器の新型の設計図や、武装のデータが並ぶ

史上初の人型兵器が生まれてから数百年、様々な進化を遂げ大型化、重武装化から、最近では小型化が進んでいる

今回二人がテストする新型機は、既存の中では最も小型化されている

「どうなんだ？新型」

クロウリイが小説を読みながら聞いてきた

「乗ってみたいとわかんないけど、聞いてたよりだいぶいいと思うよ」

「そいつぁ楽しみだ」

二人を乗せたシャトルは順調に飛行し、銀河連邦軍オーストラリア方面基地に到着した

基地に着いた二人は、まず基地司令官に挨拶を済ませると、さっそく格納庫へ向かった

「あのー、すいません」

格納庫に入ると近くにいた整備士の男に声をかけた

「あんたら誰だ？」

「ここでテストする新型機に乗る者です」

シュウヘイが認識証を見せると、男はそれに目をやり次に胸の官証を見た

「し、失礼しました！機体を見に来られたのですか？」

「はい」

「本当に行くのかぁ？おれはもう疲れちゃったよ」

「まあまあ」

「ごねるクロウリイの背中を押して案内されるまま格納庫を進む

格納庫の一番奥にひときわ頑丈そうなハッチがある

その横にある昇降機で上に登り細い通路を歩いてハッチの前に来た

「それじゃ開けますよ」

整備士の男がパネルを操作するとゆっくり開きだす
運命の扉、
伝説の扉が

「ナンバー00《流星》ナンバー01《明王》」

整備士の男が言った

「こいつらの名前です」

目の前に現れた機体はライトの光を反射し、眩しく輝いている

白を基調として背中に四基のスラスターを装備した高機動仕様の
《流星》

黒を基調として高出力ジェネレーター搭載の砲撃支援仕様《明王》

だるそつに手摺りに寄り掛かっていたクロウリイも、体を起こし
新たな相棒を見上げている

「これが……新型かよ」

「すごい……」

見上げながらやつの思いで言葉をもらす二人
整備士の男は誇らしげに話を続ける

「今日中に基本調整は終わりますから、明日自分に合うように最終
調整をしてください もちろんおれ達も手伝います」

「シュウヘイ、こりゃあ……」

「うん、明日までなんて……」

「待つてらんねえよな」

そつ言つと二人はリフトを使いコクピットに乗り込んだ

「ちょっと！少尉！」

「OSぐらいはいじらせる！」

「邪魔はしませんから！」

二人は、新しいおもちゃを買ってもらった子供のように、目を輝かせている

こうなると二人を止めることは出来ない

彼らは自分に合わないOSはことごとく書き替えてきたのだ

コクピットでOSの書き替えを始めた二人、作業は深夜まで続いた

そして翌日、模擬戦闘での最終テストを迎える

EP2nd 宇宙へ

オーストラリア、銀河連邦軍演習場

「エネルギーフィールド展開完了」

「流星、明王、出ます」

地面のハッチが開き、二機の新型機が姿を現した

上空には六角形のシールドがいくつも繋がり、大きなドーム状のフィールドを形成している

このドーム内が最終テストの戦闘区域になる

「両機、システム異常なし」

「準備整いました」

「敵を配置しろ」

二人の前に今回の敵役として、銀河^{ゼロ}連邦軍量産機が三機配置された

「ゼロか、懐かしいな」

「こいつの開発が始まった時以来だな」

「二人とも、始めるぞ」

シュウヘイが司令官に返事をして最終テストが始まった

「クロウ、久しぶりにいつも通りいける？」

「当たり前だ」

それを聞いて少し嬉しそうに笑うと、流星を操りゼロに向かって行った

「行くぜ！」

クロウリイも、大型スラスターで低空を滑るように飛ぶ流星を追い掛けながら、明王に装備されている武器の中から一つを選んだ

「へえ、凄い品揃えだ　まずはこいつだ」

明王の背部には二連装レール砲が装備されている

普段は格納されているそれを起こし、肩に固定、照準を合わせる

「シュウヘイ！当たんじゃねえぞ！」

両肩の砲口から黄色い閃光が走る

レール砲はゼロ部隊の少し前方に着弾、砂埃がもうもうと舞い上がる

「くそっ！前が見えない！」

「上だ！」

ゼロのコクピット内に警報音が鳴り響く

たが気付いた時には機体の胸部にペイント弾が直撃していた

残るは一機

「このっ……！」

流星が着地したタイミングに合わせてライフルで狙うが、その前に連続の衝撃に襲われた

これで三機すべて、シルバーの機体に赤いペイントがいくつも付いた

実弾ならば撃墜は確実だろう

「これで終わりか？準備運動にもなんねえぞ」

砂埃が晴れると、その向こうにはライフルを構える明王の姿

「すまんが今日はここまでだ 帰って休んでくれ」

「ちえっ、終わるかよ」

クロウリイは文句を言いながらも、シュウヘイに急かされて帰路に着いた

オーストラリア基地CICルーム

CICスタッフのジェシカ・シモンズは、昼間のテスト結果の解析の為パソコンに向かっている

「ジェシカ、どうだい？」

CICルームの室長の男が話しかけてきた

「凄いです、初めて乗ったとは思えません」

ジェシカはパソコンを操作しながら答える

「あの二人には三カ月ではブランクにもならないか」

「これで二人は前線に戻るんですね」

「ああ 均衡が崩れるだろう」

ジェシカが言った前線とは、地球から遙か遠く三百万光年離れたドーガ星圏一帯のこと

銀河連邦からの独立を唱える軍事惑星国家と交戦状態になっているのだ

現在も両軍の艦隊が激しい戦闘を続けている

「これでようやく前線に戻るな」

「僕はなるべくなら行きたくないけどね」

「まさかおれ達がいなくなった途端負けてないだろうな？」

彼らは翌日にも前線に戻らなければならない

殺人的な強行日程でテストをこなした

そして翌日、流星、明王と同時に開発された新造戦艦《月光》で、宇宙に上がる

銀河連邦軍オーストラリア宇宙港

基地から北にシャトルで三十分、荒野が広がる広大な場所に宇宙への出口はある

施設から東西に大きく飛び出した空へ向かって伸びるレールのような物がある

戦艦などを宇宙に上げる為のマストライバーだ
そのマストライバーのレールの根元に一隻の戦艦がスタートの時を待っている

銀河連邦軍新造戦艦《月光》

先にいくほど細くなっていく形状の船体の周りを羽状のシールド発生機が回転する

プラズマ・キャノン砲、レール・キャノン、高機動ミサイルなどを装備し陽電子砲までも装備する

高機動戦闘艦として建造された為、他の戦艦よりも速力に優れる

「発進準備完了しました」

「よし、発進！」

レールから艦体が少し浮き、加速用のロケットブースターに火がついた

摩擦が限りなく0に近い為ぐんぐん加速し、あっと言う間に空の彼方へ消えていく

揺れが収まりしばらくすると、急に体が軽くなった

窓から外を見れば、青い地球と漆黒の宇宙のコントラスト

いつ見ても地球が美しい惑星であると実感する瞬間だ

「地球の引力圏を突破しました」

「ブースターを切り離し、ワープドライブ用意」

「ブースター切り離し、ワープドライブユニット異常なし」

月光居住区二階

二人部屋がいくつも並びシュウヘイとクロウリイの部屋もこの階にある

部屋の中はベッドとデスクがあるだけの簡素な作りだ

クロウリイはベッドに寝転がり、シュウヘイはデスクでパソコンを開く

銀河連邦軍情報局のデータベースにアクセスして、ドーガ星圏での最新の戦闘映像を見してみる

「クロウ、これ見て」

「なんだ？」

クロウリイは上のベッドに頭をぶつけないよう低くして起き上がり、シュウヘイの横からパソコンを覗く

パソコンの画面いっぱい映像が映し出されている

「おお、やってるな」

「そんな呑気に言っていないでよ 映像を見るかぎり、戦艦の主砲の威力、シールド強度、機動兵器の性能、ほとんど互角だよ」

「あとは使い手しだいってことか」

映像からは敵戦艦のビーム砲がシールドに当たって弾かれる様子、撃墜された機体が爆発する様子、飛来するミサイルを撃ち落とす対空射撃などリアルな戦場が見てとれる

『本艦はこれよりワープ航法に入る』

その時、ワープを告げる艦内放送が流れた

この後月光はワープを繰り返しながら、最前線の一步手前、ルミ

ナス星圏宇宙基地へ向かう

EP3rd 闇の胎動

月光がワープ航法に入った頃、最前線のドーガ星圏では、今まさに戦闘が始まるうとしていた

「艦長、月光から入電がありました ワープ航法に入ったそうです」

副長が入電の内容を伝え、立ち上がり指示を出す

「敵艦隊の様子は？」

「今のところ大きな動きは……いえ！敵艦隊から機動部隊、多数発進！」

オペレーターが叫ぶ

「こちらにも発進させる！全艦攻撃開始！」

艦隊を構成するのはムラクモ級戦艦とオロチ級戦艦合わせて百隻近く

敵も同等数を展開している

機動部隊が発進したのをきっかけに二百隻もの壮絶な撃ち合いが始まる

「高エネルギー接近！」

「シールド展開！撃ち返せ！」

敵のプラズマ砲がシールドを直撃すると、閃光と衝撃が襲う

そして前衛の部隊には敵の機動部隊が襲いかかる

「機動部隊接近！」

「対空砲火、ミサイル装填！近付けるな！」

先陣を切って突撃してくる敵機を、ミサイルと機銃で迎撃する

機銃を回避しそこなつた敵機の右足を吹き飛ばし、バランスを崩したところにミサイルが直撃し爆散した

残りの部隊が撃沈を狙うが、味方の部隊がそれを阻止する

戦闘は開戦当初と比べると大きな進展もないまま、硬着状態が続いている

その頃シュウヘイとクロウリイを乗せた月光は一度目のワープを抜け、木星圏宇宙基地に寄港していた

「このままじゃ運動不足になっちまう」

「寝てただけでしょ」

二人は宇宙基地に到着すると基地司令官に呼び出され、司令室に向かっていた

司令室の前まで来るとドア横のインターフォンを押す

「シュウヘイ・サカキ少尉、クロウリイ・ラウ少尉です お呼びで
しょうか？」

するとすぐに返事が返ってきた

「来たか 入ってくれ」

「話ってなんすか？」

クロウリイが面倒臭そうに言う

「君たち二人には月光の補給中に、うちの兵を訓練してほしい」

「訓練つて、それは何も僕達じゃなくても……」

「せっかく君たちが来ているんだ 兵達たつての願いを聞いてくれないか」

その後結局司令官に押され、二人は訓練を引き受けることになった

「……予定通り訓練の相手をさせました 後はうちの兵が……はい、
それでは」

その後二人は訓練の相手をするため、ゼロで宇宙へ出た

「さっそく始めるよう、どこからでもどうぞ」

「お願いします」

相手は同じゼロ四機

今回もペイント弾を使い、胴体に命中したら戦闘不能とする

「おいおい、そんなんじゃ当たんねえぞ」

クロウリイは相手の攻撃をかくぐり間合いを詰め、あつと言つ間に命中させた

「はい、次」

シュウヘイも難なく一機を戦闘不能にしていた

「こんなんで訓練になるのか？」

すると残り二機のゼロが、突然訓練では使わないはずのEソードを手にした

「おい、何してんだ？」

「クロウ！危ない！」

「なっ！」

振り向いた視線の横をペイント弾ではない一筋の光が走り、ゼロのライフルに命中した

とっさにライフルを離し爆発から逃れる

撃ったのは戦闘不能になっているはずの二機だった

「なんのつもりだ！？おい！」

クロウリーの呼びかけにも応答はなく、構えた武器を下ろす気配はない

「クロウ、この人たち新米じゃないよ」

クロウリーのゼロが振り向いた瞬間に、ライフルを撃ち落とすなど新米のパイロットに出来るはずがないとシュウヘイは考えた

「どうなってるんだよ？」

「わかんないけど、僕達を撃墜しようとしてるのは確かだよ」

「いい度胸だ！俺たちを落とそうってんなら容赦はしないぜ！」

その頃宇宙基地の中でも異変が起こり始めていた

「あゝ……交代まだかあ」

基地のCICでは交代の時間が迫っており、早く交代したい今の担当者が首を長くして待っていた

「もうすぐ来るだろ」

するとCICルームの扉が開いた

「ほら、来たぞ」

「やっと休めるかあ、とりあえず寝たいよ」

だが交代で来たはずの兵士達はいっこうに席につこうとしない

「なんだ？」

すると一人が口を開いた

「安心しろ、寝かせてやるよ……永遠にな」

突然その男が銃を取り出した

銃口を座っている兵士達に向けると、ためらう事無く引き金を引いた

「CIC制圧完了」

絶命し床に倒れている兵士達を見下ろしながら、男は通信機でどこかに連絡をする

そして監視カメラの映像には、同じように武器を持った銀河連邦の兵士が廊下を走っていく姿が映っていた

陰謀の影が静かに基地に広がり始める中、月光の休憩室にはデータの整理を終えたジェシカが、コーヒー片手に一息ついていた

「ふう……」

長時間パソコンに向かっていた為、目の疲れと肩こりがひどい

片手で自分の肩を揉みながら首を回す

「あの二人、呼び出されてたけど大丈夫かな」

シュウヘイ、クロウリイ、ジェシカの三人は三ヶ月前まで、ドーガの最前線で同じ部隊に所属していたが、戦闘が膠着状態に入りその状況打開のため、新型機のテストパイロットとそのサポート要員として三人は地球に行っていたのだ

そんな事を考えていた矢先、突然警報音が鳴り響き、驚いたジェシカは持っていたコップを床に落としてしまう

「な、なに!？」

慌てているところに同僚の女性スタッフが走ってきた

「ジェシカ！」

「レイン！」

彼女はジェシカの軍学校時代からの友人で《レイン・ウェインズ》

二人は月光のブリッジ要員だ

「何があつたの！？」

「よくわかんないけど、基地のCICと連絡が取れないの」

「じゃあとにかくブリッジに戻ろう」

CICを制圧した犯人グループは戦艦ドックへの通路を残し、他の全てのハッチをロックした

これによつて基地内の兵はそのほとんどが部屋に閉じ込められ、それを逃れた兵はドックの二区画手前で防衛線を敷いた

「奴らの狙いはおそらく月光と新型二機だ！発進準備が整うまで時

間をかせぐ！」

その時前方の壁の影から銃だけ出して撃ってきた

「来たぞ！」

倒した机の影や通路の影から撃っては隠れ、撃っては隠れと繰り返す

こうして時間を稼ぎながら、ドックでは月光の発進準備が急ピッチで進んでいる

EP4th 更なる危機

「まだ出れないか!？」

艦橋に月光艦長マーカスの声が響く

「全システムが立ち上がってません!」

月光の運航にあたっては他の戦闘と大きく違う部分がある

それは高性能コンピューターのサポートによって、ブリッジ要員は艦長を含めて通常の半分、五人で済むことだ

「くそっ!だから全システムを切るなんておかしいって言ったんだ!」

マーカスは怒りのあまり、椅子の肘掛を叩いた

そこへシュウヘイ達から通信が入った

『おいブリッジ!誰がいるか!?』

レインは突然の大声にイヤホンを耳から離れた

「相変わらずバカ声ね」

「クロウ、よかった二人とも無事だったのね」

『なんとかな　しかしどうなってんだ！？殺されかけたぞ！』

ジェシカは今基地内で起きていることを簡単に説明した

「クロウリイ、お前達もすぐに戻れ！敵はお前達の機体を狙ってる」

『艦長！みんな無事なんですか？』

「ああ　ドックは確保してある、急げよ！」

通信を切ると再び発進準備の続きに取り掛かる

一方シュウヘイ達も命令通り、月光に戻ろうとしていた

「よし、戻ろう」

「おう」

周辺には、彼らを襲った四機のゼロの残骸が漂っている

なんとか倒せたものの、機体は無傷では済まなかった

特に撃つのをためらったシュウヘイの機体は、シールドも破壊され所々装甲がボロボロになってしまっている

「あの感じじゃ月光が出るまでまだ時間かかるね」

「しょうがねえ、俺たちも加勢するぞ」

基地の方へ振り向き、最高速度で戻っていく

宇宙とドックを繋ぐハッチの前まで来ると、中の兵士に連絡しハッチを開けてもらいドックに入ると、月光の外部ハッチ前で機体から降り、そのままブリッジに入った

「艦長！」

「二人とも、無事だったか」

「はい、それであとどのくらい時間がかかりますか？」

マーカスはモニターでシステムの状況を見ながら答える

「まだ少しかかるな、奴らもすぐそこまで来てる」

「僕たちも行きます！」

「無理はするなよ」

ブリッジを出て白兵戦用の銃を手に取り、味方のもとへ急ぐ

扉を開けると負傷した兵士が運び出されるのとすれ違った

どうやら味方は押されているらしい

壁の影からそっと覗こうとした時、クロウリーの鼻先を弾丸がすすめて行った

「危な！このやる！」

すぐさま反撃するが、敵は壁に隠れている

「シュウヘイ！お前こうゆうの得意だろ！なとかしろ！」

「無茶言わないでよ！」

敵の人数はどのくらいなのか、装備は、黒幕は、いろんな事が気になるが、今はこの場を乗り切るしかない

飛び交う銃声と銃弾の中、シュウヘイも必死に反撃する

その時、敵が何かを投げてきた

「みんな！隠れて！」

それを見たシュウヘイは銃で撃ち落そうとする

何とか一つは落としたが、残る一個は落とすことが出来ず、弾がかすりわずかに軌道を変えただけだった

そして防壁代わりになっていた机の前に落ちて爆発、凄まじい爆音と衝撃、熱風が襲う

煙が晴れると兵士が一人倒れていた

いくら声をかけても反応はなく、服が黒く焦げている

『月光の発進準備ができました！』

月光から通信が入った

それを聞いてクロウリイが叫ぶ

「後退だ！月光に逃げろ！」

そう言つて通路に飛び出すと、敵が隠れている壁に向かって銃を乱射する

その隙に味方の兵士達が後退し、全員行つたところで爆弾を投げてクロウリイも後退していく

「クロウ！早く！」

クロウリイがドックに出ると、他の兵士達は幾つかの戦艦に別れて発進していた

月光に乗り込もうとすると追いついた敵がしつこく攻撃してくる

「艦長！出してください！」

シュウヘイが叫ぶと月光がゆっくりと動き始めた

ここでようやく敵も諦めたのか攻撃を止め、こちらを見ている

「くそ！なんなんだこりゃ」

シュウヘイ達の時間稼ぎのおかげでなんとか月光は基地を脱出することに成功した

他の戦艦四隻と共に喜び合う

だがそれはつかの間の喜びだった……

「これは！」

ジェシカが見たものは彼らを再び絶体絶命へ突き落とすものだった

「前方距離三十にワープアウト反応多数！」

「時間は！？」

「一五秒後です！」

マーカスが叫ぶ

「全艦通達！第一種戦闘配置！機動部隊発進準備だ！」

マーカスの指示と警報音が月光内に響き渡り、兵士達はバタバタと配置についていく

もちろんシュウヘイとクロウリイも、ブリッジを飛び出し格納庫へ走った

EP5th 突破

「来ます」

月光の前方に次々と《ゲート》が現われ、中から戦艦がワープア
ウトしてくる

「連邦の戦艦だ」

出てきたのは銀河連邦所属の戦艦、約二十隻が進路を塞ぐように
している

「戦闘配置解きますか？」

「ダメだ あれが本当に味方とは限らない」

基地を襲撃したのも連邦兵、現われた艦隊も信じることはできない

「艦長、前方の艦隊から通信です」

『月光を明け渡せ、新型の二機もだ』

低い声で威圧的に言ってきた

マークスも押されないように強気で言い返す

「それは出来ない あんた達の目的はなんだ」

『答える必要はない 拒否するならば容赦はしない』

相対する艦隊の全ての砲門が月光を狙っている
それが容赦しない、と言言葉が脅しにとどまらないことを示している

「艦長、どうしますか？」

マーカスは少し考え込み答えを出した

「強行突破する」

「強行突破ですか!？」

ジェシカが確認するように聞き返す

だがマーカスの答えは変わらない

これが皆が声をそろえるマーカスの長所、決断力の高さ

それによって多くの戦果を上げ、月光の艦長に抜擢されたのだ

「月光は最新鋭艦だ、シールド強度も総火力もあっちより上だ」

前方を遮るのは月光の前に艦長を勤めていた戦艦だ

そのスペックはよくわかっている、その上での強行突破だ

ブリッジに緊張が走る

「全艦一斉射撃の後、シールド全開、最大戦速で突破する」

「全艦に通達します」

ジェシカが味方戦艦に連絡すると、すぐに了解の返事が返ってきた

「艦長も相変わらず無茶だなあ、あれを強行突破するなんて」

シュウヘイは半ば諦め気分で言った

だがクロウリイは違つようだ

「強行突破か、まあそれしかねえよな」

先程二人にも強行突破の作戦が伝えられた

彼らは艦上にて敵を迎撃する

『全艦通達、作戦を開始する』

続けてマーカスは操舵手のサンダースに指示をする

「サンダース、射程ギリギリまで前進だ」

「了解、前進します」

開始と同時にゆっくり前進していく

様子を伺っているのか敵艦隊に動きはない

全員が息を呑み、緊張に押し潰されそうになりながら指示を待っている

「距離二五」

マーカスの頬を汗が流れる

「距離二三」

そして……

「距離二一！」

「機関最大！全速前進！全艦一斉射撃！」

戦艦五隻の全ての砲門が一斉に放たれた

敵艦隊の列の右翼を閃光が貫く

この一斉射撃で進路上の敵艦三隻を撃破した

「敵、機動部隊接近！」

「弾幕を張れ！こちらの部隊も攻撃だ！」

『近寄ってくんじゃねえよ！』

シュウヘイとクロウリイも艦上から迎撃をする

砲撃戦用の明王は問題ないが、近、中距離戦用の流星では射程距

離に不安があつた

そこで急遽、元は明王用の単装高エネルギー砲を装備し、脇に抱えるようにして発射する

「当たれ！」

赤い閃光が放たれ一機を撃破すると、そのまま横に振りさらに二機を撃破した

前方に突破口を開いたかに見えた月光だったが一隻の敵艦が塞ぐように移動してきた

敵艦から放たれたレーザー砲が月光を襲い、シールド強度を奪っていく

「シールド強度八十パーセントに低下！尚も低下中！」

レインからの報告にマークスの顔が歪む

前方の敵艦だけではなく左右からも攻撃を受けている為、このままではシールドが消滅してしまう可能性があつた

「反物質誘導弾を使う」

反物質誘導弾は着弾時に発生する対消滅による膨大なエネルギーにより戦艦のシールド強度を一気に低下させる

「発射！」

艦の船底部から誘導弾が発射された

誘導弾は敵艦のシールドに命中し、まばゆい閃光が奔る

「敵艦、シールド消滅」

「レール砲、撃てえ！」

月光の集中砲火は敵艦を捉え、程なくして爆散した

「よし！突破する！ワープドライブ用意！」

ワープドライブに備え艦上で迎撃していたシュウヘイとクロウリイも、振り落とされないように船体に捕まる

だがその時だった

姿勢を低くしてワープに備えていたクロウリイの明王の足元に敵機のライフルが命中、その衝撃で月光から引き離されてしまう

「しまった！」

「クロウ！」

手を伸ばすがあつという間に届かない距離まで離れてしまった

明王の姿が宇宙の闇にどんどん小さくなっていく

「艦長！クロウが！」

『なに！？もうワープドライブに入るぞ！？』

「戻ってください！」

『無理だ！』

今、月光は宙域離脱のためワープドライブの態勢に入っている

ここで止めてしまうと突破出来ないのはもちろん、撃沈されてしまいう可能性もある

だがそれでも引かないシュウヘイに対し本人から通信が入った

「シュウヘイ、お前はさっさと行け」

「クロウ！」

「奴らの狙いはこの機体で、こいつはおれにしか扱えない だから大丈夫だ」

流星と明王には最先端のパイロット認識システムが使われており、神経接続によって認識する

すなわち“本物の”クロウリイでないと扱えないのだ

「絶対助けるから」

「さっさと来いよな」

そう言って通信は切れた

レーダーに映る明王の反応もどんどん離れていく

強行突破を成功させた月光と他の四隻は、ワープドライブに入り
宙域を無事脱出した

EP 6th 親友

「全艦ワープ亜高速空間に突入、流星も収容しました」

「どうにかなったか」

マーカスは小さく息を吐くと、ほっとした様に椅子に座る

他のメンバーにも安堵感が広がる

「追っ手はいるか？」

レインはリーダーに目をやり追っ手がいないことを確認すると
「ありません」
と答える

「クロウリイは？」

レインは首を横に振る

月光に収容されたシュウヘイは自室で窓から見える景色を、亜高
速の光を眺めていた

「クロウ、無事でいてくれよ……」

親友の無事を祈りながら、彼は出会いの頃を思い返していた

軍に入ろうと思う者なら必ず中高一貫の軍学校に入学する

父親が軍の高官であつたシュウヘイも、意志とは関係なく周りに流されるまま入学した

そしてその年、ザウザー軍事惑星国家が銀河連邦政府に対し宣戦布告、戦争状態に入る

「戦争……？」

中学生である彼らにとって戦争は教本の中のみの、実感の湧かぬもの

そして伴わない感覚の中、中等過程を終了し高等部へ向かうシヤトルの中で二人は出会う

「ここ、空いてる？」

「あ、どうぞ」

そうやってシュウヘイの隣に同じ制服を着た少年が座った

そして座るなりいきなり声をかけてきた

「お前、部門どこ？」

初対面でのお前呼ばわりに驚き一瞬返事が遅れたが「パイロット

部門」と答えた

「なんだ一緒か」

その後しばらくは沈黙が続いたが、ふとシュウヘイが隣を見ると先ほどの少年は荷物の中から何かを取り出そうとしている

「それ、小説？」

思わず聞いてみるとその少年は嬉しそうに答えた

「珍しいだろ、完全な紙製だぜ？」

「今時どこで手に入るの！？」

「よくあるのは地球の古い街だな、低下層に行くほどレア物があるんだ」

それから二人は意気投合し、中等部時代のことやこれからの高等部生活についてなど、いろいろと話し合った

「そうだ、おれはクロウリイ・ラウだ」

「僕はシュウヘイ・サカキ」

シャトルが到着し他の乗客が降り始めた時、思い出したように自己紹介をした

「サカキってまさか、オウド司令官の！？」

クロウリイは握手をしたまま驚きの声を上げる

「うん、まあ……ね」

シュウヘイは父親が好きではない

何をするにも父親の影が付きまとい、彼に自立の道を許さなかった

シュウヘイの父親、オウド・サカキは地球全土の銀河連邦軍を統括する、地球方面軍統括司令官である

ゆえにシュウヘイが軍に入るのは当然とされ、そこに本人の意思が介入する余地はなかったのだ

中等部時代の同級生はみんなどこかよそよそしく、シュウヘイの心には常に孤独感があった

「別に関係ないけどな」

「え……」

シュウヘイは言葉を失った

今まではみんな、自分の正体を知ると一定の距離を置き、それ以上近づいてくることはなかった

だが、この言葉を聞いたシュウヘイは彼が今までの人間とは違うと感じた

クロウリイの言葉は、そんなうわべだけの同級生が引いていた境

界線をいとも容易く踏み越えて、クロウリイへの信頼の第一歩となつたのだ

そして二人はシャトルを降りる

同じ部門といえども、一番人気で何千人と生徒がいる中で同じクラスになる可能性は低い

だが初めてのクラス顔合わせの日、いつものように目立たない端の方にシュウヘイは座っていると

「隣、空いてる？」

「あ、どうぞ……？」

どこかで見たとようなシチュエーション、そしてどこかで聞いたような声、隣を見上げるとそこには彼が立っていた

「シュウヘイじゃねえか！」

「クロウリイ！？」

「なんだよ、クラスまで同じとはなあ！」

シュウヘイ達のクラスは入学時のテストで高成績順に集められた、言わばエリートクラス

終了後はすぐに即戦力として配属される

「そこまで!」

「あの二人また全滅させたよ」

「本当すごいなあ」

そのエリートクラスの中でも二人は飛び抜けていた

実戦を忠実に再現したシミュレーターでは、ことごとくザウザー軍を全滅させ、その他の任務も完璧にこなした

その実力を買われ終了後すぐに前線部隊に配属され、十九歳になった時異例のスピードで少尉に昇進する

これが彼らの今までの歴史、彼らは親友同士であり良きライバルであつた

宇宙に残されたクロウリィは、敵に包囲され囚われの身となっていた

今クロウリイがいるのは連邦軍戦艦の独房の中

独房に設置されている監視カメラの映像が映っているモニターの脇で、艦長らしき男が通信モニターで誰かと話している

『どちらを捕らえたのだ？』

「明王の方です」

『そうか、準備は出来ているな？』

「はい」

『では、すぐに始めろ』

「了解しました、オウド司令官」

そして監視モニターには兵士に連行され、どこかに連れて行かれるクロウリイの姿が映っていた

EP7th 宣言の日

ワープドライブでなんとか木星圏から脱出した月光だったが、他の四隻の戦艦と同じように急激な人員増加による物資の不足が心配された

そこで人員を降ろすか物資を補給するため、最寄の宇宙基地へ立ち寄った

『わかった、人員はこちらで受け入れよう。ここまでご苦勞様』

「ありがとうございます」

「よかったですね」

基地司令官との通信を終えたマークスにジェシカが言うと、マークスは少し笑って背もたれに寄りかかった

表情からは疲れの色が見える

「なんだか悪いことが起きようとしてますね」

「シュウヘイ」

クロウリイが敵に捕まって以来、部屋に籠っていたシュウヘイがブリッジに姿を見せた

落ち込んでいるかと思いきや、その顔は、なにか決意に満ちたような表情をしている

「連邦の中にザウザーのスパイがいたって事か？」

「僕たちを襲った艦隊の数を見ると、外部から入ってきたと言うよりは元々連邦内部の人間の仕業と考えた方が……」

「造反か」

その時宇宙基地から受け入れ準備が整ったと連絡が入った

マーカスは一先ず人員を降ろすためにサンダースに指示をだした

翌日、彼らの一日は緊急事態から始まった

「なんだって!？」

レインからの報告を聞いたマーカスは、驚きのあまり聞き返した

レインはもう一度復唱する

「ドーガ星圏でザウザー軍と戦闘中だった連邦軍艦隊が、後方に現れた友軍から突如攻撃を受け、連邦軍艦隊は全滅しました」

「衛星からの情報によると後方に現れた連邦軍艦隊は、その後ザウザー軍と一緒にワープドライブに突入したようです」

レインの復唱後、ジェシカが新たに入った情報を付け加えた

ブリッジにいた全員が言葉を失い、静まりかえった

「この艦隊がザウザー側に寝返ったとしても、この程度の数では状況は変わらないでしょう」

そんな中、ジェシカの横からモニターを覗き込むシュウヘイだけは冷静だった

だがシュウヘイは未だその言葉の真意を口にはしていない

「離反艦隊は今後さらに増える」

サンダースがポツリと呟いた

離反艦隊が増えるということは、数で劣勢だったザウザー軍が勢力を大幅に増やすことになる

「現在の勢力比は三・五：六・五ですね」

彼は五人目の月光ブリッジ要員ホムラ、火器管制を担当する

月光の高性能な火器管制は、中枢コンピューターから送られてくる敵の情報を元に、最も適した迎撃武装を選択する

しかし意図的に人間が介入することも可能である

「このままだとマズイよな」

マーカスの言葉は最悪の状況を懸念している

まだ離反艦隊が出るとすれば、現在の勢力比が覆るであろうことは容易に想像できる

その先にあるものは、銀河連邦の敗北だ

銀河連邦政府はこの事態を重く受け止めると同時に、内部にいる首謀者の特定を始めた

だが数日後、首謀者は自らその姿を現わした

銀河放送ネットワークの中継基地を乗っ取り、世界中に声明を届けた

「そんな……」

整備場、基地内ロビー、司令室、ブリッジ、その時全ての視線はモニターに集まっていた

二人の部下を従えて姿を現わしたのは、地球部隊を統括する男だった

その男、オウド・サカキは高らかに宣言する

『銀河連邦の支配を終わらせる為、同志達よ立ち上がる時が来た』

シュウヘイは自室のモニターでこの放送を見ている

久しぶりに、数年ぶりに見た父親は、その瞬間から銀河連邦の敵となった

数日後、造反幫助の疑いで軍法会議にかけられるが、証拠不十分で月光内での謹慎処分に留められた

さらにその後数週間で銀河連邦に属する惑星国家の内、三分の一が離反し両陣営の戦力比はほぼ五分となった

EP8th 鋼鉄の騎士

オウドの造反の後、数的有利を失った銀河連邦軍は、ザウザー軍の勢いを止められず、各地で敗戦を続けていた

そして各地での敗北の報告と一緒に、未確認ではあるが気になる情報があった

《連邦軍が全滅した戦場には、明王と酷似した機体が出撃していた》

情報が少ない為断定は出来ず、そのことはシュウヘイの耳にも入っていた

「クロウがザウザー軍に……？」

そんなはずはない、何かの間違いだ、そう思った

似ているだけでクロウではないと信じていた

この時銀河連邦軍は、これまでの劣勢を覆すため一大反攻作戦を開始しようとしていた

デュエル・ナイト
作戦名

ゼロの強化発展型のゼロ Mk2に《デュエルシステム》を搭載した、無人^{ナイト}人型高速戦闘艇による、敵宇宙基地の同時攻略作戦だ

三日後の作戦開始に合わせて、月光も味方艦隊との合流地点に向

かっていた

昼食時、月光のブリッジメンバーは今回の作戦について意見を交わしている

「ナイトですか？」

「技術開発部門が大事に育てた秘蔵っ子だよ」

「あそこは最近それしかやってないですね」

「ま、無人でどこまでやれるかお手並み拝見しようじゃないか」

ナイトは高性能コンピュータと人工頭脳を持ち、命令を受けるとその遂行のために最適な行動を独自に判断し、実行する

銀河連邦軍の戦争集結への切り札が、このナイトなのだ

「ナイトねえ、たいそうな名前だ」

サンダースはコップの水を飲み干すと、目の前のカツ丼を一口食べた

カツ丼の横にはカレーもあった

「作戦が成功したら人間は必要なくなるんですかね？」
と、ジェシカが問う

「戦場から人間がいなくなつては戦争の重みが伝わらない」

マーカスは否定する、同時に昔の事を思い出していた

上層部の現場を無視した命令のために宇宙に散つた、真面目すぎた戦友のことを

翌日、作戦開始の二日前に月光は味方艦隊と合流した

その味方部隊の大半はナイトで構成されている

作戦の最終打ち合せのため艦隊の旗艦を訪れたマーカスは、その帰り道ナイトの格納場へ立ち寄った

広い格納場をいっぱいに使って、ナイトが静かに並んでいる

左腕自体がブレード発生器になっている姿は、まさに物言わぬ鋼鉄の騎士だった

「こいつがいればこの戦争は勝つたも同然です」

技術開発部門の人間の言葉をマーカスは複雑な心境で聞いていた

「人間は必要ない……か」

出撃の時を待つ騎士達を見ると、彼ら自身がそう言っているようにさえ感じた

戻ったマークスから月光に与えられた任務が告げられた

「作戦終了まで管制艦を護衛すること」

「戦闘には参加しないんですか？」

「戦闘部隊は全てナイトだ」

「艦長」

「ん？」

「あの機体は出てくるでしょうか」

シュウヘイの言う機体とはもちろん連邦の部隊を全滅させた機体だ

自分も出撃したい、と言うシュウヘイに対しマークスは、上からの命令だ、と言って許可しなかった

二日後、予定時刻と同時に目標の基地に侵攻開始

作戦はまずザウザー軍の警戒衛星を破壊することから始まった

そして間髪入れず戦艦から長距離高速ミサイルを発射

ほとんどが撃墜されたがその隙にナイトの部隊が高速で接近、奇襲を仕掛ける

完璧に統制のとれた攻撃と無人ならではの無茶な機動で、敵部隊を圧倒

四つの目標の内、三つの制圧に成功した

「残りはここだけか」

作戦は順調に進み、成功は時間の問題だった

その時、レインが叫ぶ

「新たに敵部隊接近！内一機未確認機です！」

それを聞いたシュウヘイはすでに格納場に向かって走っていた

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2495a/>

星戦戦記

2010年10月10日06時27分発行